The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	日本語初期指導教室におけるオンライン絵本読み聞かせ支援
Author(s)	阿竹, 仁以奈
Citation	日本語講座年報. 2024, 2022-2023, p. 38-40
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/95469
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

日本語初期指導教室におけるオンライン絵本読み聞かせ支援

阿竹（栗田）　仁以奈

1. はじめに

筆者は、9 月から 12 月上旬まで、ある自治体の公立小・中学校に新規で海外から転入してきた子どもたち向けの日本語初期指導教室において、子どもたちの母語によるオンラインでの絵本の読み聞かせ支援に携わった。子どもたちの母語は多様で、今期はベトナム語、インドネシア語、フィリピノ語、ポルトガル語、中国語による読み聞かせが行われた。実際に絵本の読み聞かせ支援を行った、子どもの母語（ベトナム語とインドネシア語）を学んでいる、本学の学部生と、子どもの母語（インドネシア語）ネイティブの留学生のアドバイザーとして、筆者はこの支援に関わった。

2. 母語による絵本読み聞かせ支援と支援者

この読み聞かせ支援の目的は、

① 子どもたちが本好きになる
② 日本語初期指導教室修了後も引き続き本を読んでくれる
③ 日本語がまだ十分でなくても知的刺激を受ける機会となる(2023/9/8 日本語初期指導教室の担当の先生からのメール)

であった。また子どもたちが彼らの母語を学んでいる大学生と関わることで、子どもたちのアイデンティティを尊重したいという思いを持って支援を行った。

次に筆者がアドバイザーとして関わった支援者 3 名（A さん、B さん、C さん）について述べる。

ベトナム語の支援者（A さん）は、ベトナム語専攻の学部生で、半年間、ベトナムへの留学経験がある。ベトナム語を母語とする子どもたちは、小学 1 年生から中学 2 年生まで計 13 名であり、ベトナム語の支援者２名のうち、低学年（小学１年生から３年生の６名）を週１回、A さんが担当した。子どもたちを２グループに分け、各グループ約 20 分ずつの支援を行った。

インドネシア語の支援者（B さん）は、インドネシア語専攻でインドネシアで 2 週間の短期滞在をした経験がある。C さんは、インドネシアからの留学生である。インドネシア語を母語とする子どもは小学１年生と２年生の２名のみで、インドネシア語の支援者は 4 名だったため、週 3 回持ち回りでの支援を行った。B さんは週 1 回の支援、C さんは隔週で支援を行った。

支援者	A さん	B さん	C さん
支援で用いた言語	ベトナム語	インドネシア語	インドネシア語
上記言語の学習経験	大学のベトナム語専攻で約 3 年間（内半年間は留学）	インドネシア語専攻で約 4 年間（内 2 週間インドネシア滞在）	母語話者
上記言語のレベル	・4 技能総合では中級レベル（試験） ・会話は日常会話レベル（本人談）	・初級と中級の間（本人談）	母語話者
担当した子どもたち	ベトナム語を母語とする小学１年生から３年生、６名	インドネシア語を母語とする１年生と２年生、２名	インドネシア語を母語とする１年生と２年生、２名
支援頻度	週１回	週１回	隔週

3. 支援者支援の課題

筆者にとって、母語支援の支援者のアドバイスどころか母語支援に携わること自体が初めての経験であり、うまくアドバイスができないことがたくさんあり、ご迷惑をおかけすることも多々あった。しかし支援を行っていく中で、多くの学びを得た。本報告では 2 学期に実施した絵本読み聞かせ支援で困難だった点とそれをどのように克服し

たのか、また3学期に向けての課題について述べる。

3.1 言葉の壁を越える

この支援で筆者や支援者たちが一番困難だと感じた点は、言語面の問題である。母語話者支援者の場合、自らの語学力によって子どもとのコミュニケーションに問題が生じることはあまりないが、外国語として子どもの母語を学んでいる支援者にとって、言語は障壁となりかねない。実際、支援者たちは、子どもたちの言っていることが速すぎたり方言が混ざっていたりして理解できず、聞き返すと子どもたちがそれ以上話してくれなくなり、会話が一方通行で止まってしまうと悩んでいた。筆者が支援の様子を見学していても、このような場面が幾度か続いたことで、子どもたちが話の内容に興味を持たなくなってしまい、支援者の顔が徐々に曇りはじめる場面があった。

これに対する対応策として、Bさんは支援中に出てきそうな言葉を事前に調べていた。絵本の内容に関連して、子どもに質問したいことや想定される子どもの回答を事前に考えておき、その質問に必要な単語を調べておいたことで、「会話を膨らませやすいように」していた。

また支援者が話しやすいように子どもの母語と日本語を織り交ぜてコミュニケーションを図った支援者（Aさん）もいる。Aさんははじめ、子どもとの意思疎通がうまくいかないことが自分の言語力不足によるものだと考え、自信をなくしてしまっていた。筆者は、Aさんからこのことについて相談を受けたが、適切なアドバイスが思いつかなかった。このことを、指導を受けている櫻井先生に相談したところ、子どもたちに日本語での読み聞かせをしているところを支援者に見せてはどうか、筆者が実際に支援をしなければアドバイスはできないのではないか、というご指摘をいただいた。このご指摘を受けて、筆者は日本語での読み聞かせを行うことにした。

日本語による読み聞かせ支援で心掛けたことは、低学年の子どもたちが楽しいと思えるような内容（絵本の選定、声や表情、クイズやゲーム）にすること、言語がわからなくてもコミュニケーションを図る工夫（ジェスチャーや絵、写真など）、子どもの母語や母文化を取り入れるなどである。

この読み聞かせ支援を見学したことにより、Aさんに変化がみられた。Aさんはこの時のことを振り返って以下のように述べている。

> それまではベトナム語で意思疎通取らなきゃいけないんだ、（略）って思ってたんですけど、実際栗田さんの読み聞かせを見て、日本語でもすごい子どもたちが楽しんでるっていうか、言葉じゃないんだな、って思って。雰囲気であったりとか、声の掛け方であったりとか、強弱の付け方であったりとか、あんまり何語かっていう、そんな、もしかしたらそんな大事じゃないかなって思って。ベトナム語でも日本語でもいい。空気感とかそういう、持って行き方の方が大事なのかな、って思って（2023/12/26　Aさんインタビュー）

また、支援直後に「（略）次回からは、ベトナム語と日本語を織り交ぜながら読み聞かせをしてもいいですか？」（2023/10/30　AさんからのLINE）と筆者に尋ね、翌週からは、両言語を織り交ぜて支援を行うようになった。それによりAさん自身、「しゃべれる回数も増えて、表現の幅も広がるので、その分、子どもたちが楽しみやすい雰囲気作りができ」「雰囲気自体がすごい明るくなったというか、やっぱお喋りが増えたので、前よりお互い対話ができてるな、っていう実感がありました。」（2023/12/26　Aさんインタビュー）と話している。

そして言語を織り交ぜるだけでなく、Aさんは「身振り手振りと表情」や低学年向けの「本のチョイス」も工夫するようになった。

3学期も言語にとらわれず、子どもたちが楽しめて、知的刺激を受け取れることを重視した支援を行えるよう、アドバイスを行っていきたい。

3.2 オンラインの難しさ

この支援の特異な点はオンラインであることだろう。オンラインだからこそ、遠くに住む子どもたちと支援者が繋がれる、という利点はある。しかし一方で、低学年の子どもたちとオンラインで関わるのは至難の業であった。パソコンの画面か

らいなくなってしまう子や途中で眠くなってしまう子もいて、どうやったら子どもたちが絵本に興味を持ってくれるかを考えるのは難しかった。

前述したように、声のトーンや絵本の選定等、工夫できる点は工夫したが、2学期の支援ではメリハリをつけるためのアドバイスがあまり行えず、支援が全体的にマンネリ化していたように感じる。

そのため3学期は、子どもの様子に合わせて、帯活動として歌やゲーム、クイズなどを取り入れたり、効果音や小道具を使ったり、劇やダンスのように体を使った活動を行うなどして、子どもたちが五感を使って楽しめるようにしたいと考えている。

4. さいごに

今回の読み聞かせ支援はおよそ２ヶ月半という短い間ではあったが、たくさんのことを経験させていただいた。特に実際に子どもへの読み聞かせをして支援者に見せたことは、私にとっても大きな学びとなった。

まずオンラインに慣れていない筆者にとっては、対面の何倍も気を遣って体力を消耗した。画面の映し方一つをとっても、対面の読み聞かせのようにはいかず、どのように映すべきか迷った。毎週、こうした技術面に気を配りながら、読み聞かせを行っている支援者たちに尊敬の念を抱いた。

また子どもの母語を用いることで日本語だけの時とは見違えるように子どもたちが生き生きすることにも気づいた。母語による読み聞かせを支援者たちが行うことは、子どもたちにとって大変意義のあることなのだと思った。

そして何よりも、この支援を行うまで筆者は、支援者のアドバイザーであるからという理由で支援者たちにどうアドバイスするか、ということばかりに気を取られ、子どものことが見えていなかったことに気付かされた。子どもたちがどんな活動であれば楽しんでくれるのか、どのような力をつけてほしいのか、ということを第一に考えることが重要だと思った。

3学期も読み聞かせ支援は継続される。また新しく転入してくる子どもたちとの出会いを大切にして、2学期の反省を生かしてよりよい支援が行えるよう、精進したい。

最後になりましたが、2学期に関わった子どもたち、先生方、支援者の皆さんには大変お世話になりました。ありがとうございました。

この活動は大阪大学大学院人文学研究科附属複言語・複文化共存社会研究センター（以下、阪大ふくふくセンター）の活動の一環として行いました。